様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月１０日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０６４９
研究課題名（和文）　歴史学・歴史叙述における共同性と個人性

研究課題名（英文）Collectivization and Personalization of History and Historiography

研究代表者
岡本　充弘（OKAMOTO MICHIHIRO）
東洋大学・文学部・教授
研究者番号：40113930

研究成果の概要（和文）：ナショナライゼーションやグローバリゼーションにともなって形成された歴史の共同性への疑問を提示し、個人を単位とした歴史の意味を、近年の歴史研究の重要なテーマである歴史と言語の関係、映像的な歴史の意味、さらには歴史研究への文化的アプローチをふまえて明らかにした。また学問的歴史と比較して低く評価されてきた普通の人々の日常にある歴史、すなわちパブリックプレースにある歴史の意味を取り上げていくことの必要を、今後の歴史研究の課題として提起した。

研究成果の概要（英文）：This study problematizes the collectivization of history with the development of the modern nation states and globalization, and illustrates the significance of the recognition of history from personal viewpoints in terms of the relationship between history and language, history and visuals, and the cultural approach to historical studies recently regarded as important themes by historians. It argues for the importance of doing history in accordance with the beliefs held by ordinary people in their daily lives, in other words, history in public places, that have been underestimated in comparison with a history in academic places constructed by professional historians.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２０１１年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１２年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・史学一般
キーワード：歴史理論、歴史叙述、ポストモダニズム、近代国民国家、モダニティ

１．研究開始当初の背景

（１）本研究のもっとも基本的な背景となっていたことは、グローバリゼーションの進行のなかでの歴史の変容という問題であった。研究代表者は、『国境のない時代の歴史』（近代文芸社、1993年）でこの問題を先駆的に取り上げ、本研究に先行した「グローバル化時代における歴史認識の方法」（2007～2009年度科学研究費基盤一般（C）採択課題）をとおしてその解明に努めた。

（2）そのさいにあらためて理解されるにいたったことは、歴史学・歴史研究の現状が、

①グローバル化、トランスナショナル化
②文書中心的な歴史からの転換
③学問的な歴史以外の日常的な場にある歴史への着目
④ヨーロッパ中心主義的な歴史への批判的意識の定着

という方向に確実に向かっていることである。

にもかかわらず、

ⅰ）近代科学と一定の対応関係をもつかたちで発展してきたという意味で、本来は普遍的な広がりをもつべき歴史学・歴史叙述が、ナショナルな視点になお大きく拘束されている
ⅱ）パブリックスペースにある歴史に対する関心が希薄であり、たとえば現在では人々の歴史意識に大きな役割を果たしていると考えてよい画像的・映像的な歴史が取り上げられる機会が少ない
ⅲ）なお歴史が集団的・共同的なものとされがちで、個人にある、あるいは日常的な場に存在している歴史を捉えるという視点が大きく欠如しているある
ⅳ）さらには歴史学とモダニティの関係への批判的意識に乏しい

といった問題が日本の歴史研究にはあるのでは、という問題意識が本研究が先行的な研究（「グローバル化時代における歴史認識の方法」）を継承するかたちで構想される背景となった。

２．研究の目的

（1）グローバリゼーションの進行にともない、従来のナショナルなものを単位とするものから、グローバルなものを、あるいはトランスナショナルなものを単位とする歴史のあり方が議論されている状況のなかで、本研究が取り組むべき基本的な目的として設定したことは、歴史の統合性や共同性を批判的に検討し、個人的な視点を基礎とした歴史の意味を考察していくことである。またここから派生する課題の一つとされたことは、これまでの取り上げられることの少なかった歴史叙述における「主語」の問題への注目である。

（2）歴史叙述における「主語」の問題について、もっとも理解しやすい例は教科書における叙述である。教科書ではしばしば、「イギリスは植民地を拡大し」とか、「ドイツはポーランドに侵入し」というような叙述が見られる。国家を主語とした叙述である。そうした教科書の書き手は歴史研究者であることが多い。しかし叙述にあたっては、「私は」という主語をもちいた主観的な記述がなされることはなく、個々の記述は客観性の装いをまとう。しかし、その一方で、歴史研究者によってなされる学問的な世界での歴史叙述は、基本的には書き手の氏名が特記される。しかし、そのことが必ずしも叙述の主観性を含意するわけではなく、学問的叙述であることを根拠とした客観性を担保している。

（3）ここで問題とされるべきことは、このような歴史・歴史叙述から、近代的な学問的歴史の外部にある過去認識が、たとえば普通の人々の日常的な世界にある過去認識が、しばしばその主観性を根拠に排除されていることである。こうしたことを問題とすることをとおして、主観的なもの、個人的なものを単位とした歴史認識・叙述を、ナショナルなもの、あるいはグローバルなものを単位とした共同化された歴史認識・叙述と対比させ、その意味をむしろ肯定的なものとして考察することが、本研究の目的としたところである。

３．研究の方法

人文的な研究、とりわけ基礎的な理論的問題の解明を意図した研究として、本研究では当然のことながら、検討すべき問題を扱った文献の収集・読解、ならびに同一の課題に取り組む内外の研究者との意見の交換をおこなった

（1）前者に関しては、すでに収集を終えていた *History and Theory, Storia della Storiografia, Rethinking History, History and Memory* といった歴史理論に関わる主要な研究雑誌をさらに継続して揃え、また研究のテーマと合致する *Journal of World History, Journal of Global History, History and Film* などの歴史理論誌を収集し（なお当初予定していた歴史と映像というテーマに関わる文献・資料は、後述する東洋大学人間科学総合研究所の別個プロジェクトをとおして収集した。）、また関連文献を収集し、その読解・分析をおこない、後述の著作・論文などの執筆にもちいた。

（２）後者に関しては、研究期間中に東洋大学より提供された研究資金などを合わせて利用しながら、2010年8月にアムステルダムで開催された国際歴史学会議（ＣＩＳＨ）、2011年1月にボストンで開催された第125回アメリカ歴史学会大会（ＡＨＡ）、同月にサンフランシスコで開催されたアメリカ大学協会会議（ＡＡＵＣ）、7月に北京で開催された世界史学会（ＷＨＡ）、同じく7月にアテネで開催された歴史研究集会（ＡＴＥＮＥＩ）、8月にオスロで開催された国際文化史学会（ＩＳＣＨ）、2012年1月にシカゴで開催された第126回アメリカ歴史学会大会、7月にソウルで開催されたアジア世界史学会（ＡＡＷＣ）、9月にリンツで開催された国際社会労働史学会（ＩＴＨ）、2013年1月にニューオリンズで開催された第127回アメリカ歴史学会大会、などの国際学会に参加し、自らの成果を明らかにしつつ、内外の研究者と意見を交換し、研究課題の解明の一助とした。

（２）また以上に合わせて、2011年度より採択された東洋大学人間科学総合研究所プロジェクト「トランスナショナル・カルチュラルヒストリーの今後」（～2013年度）の研究代表者として、本研究期間中に予定されていた海外の研究者招聘による相互討議を試みた。当初予定されていたディペシュ・チャクラバルティーの招聘は日程の都合で実現でなかったが、歴史のナショナライゼーションへの批判を提起した酒井直樹（コーネル大学）やグローバルヒストリー研究の国際的第一人者であるスヴェン・ベッカート（ハーヴァード大学）を招くことができた。このうちベッカートを招いての公開セミナーは、滞日中に東日本大震災が発生し、急遽帰国したために中止となったが（後日既に送られていたペーパーを代読するかたちで研究会を行った）、2012年10月にはピーター・バーク（ケンブリッジ大学名誉教授）を共同で招聘し、文化史の問題を中心に、グローバル化された、あるいは情報化された時代における歴史研究の現在的問題を議論する場を提供することができた。

なおこうした積極的な国際交流においても示されたように、本研究では研究の公開性を重視した。「４、研究成果」欄において後述するように、研究代表者が研究期間に主宰・推進したセミナー、シンポジウムは基本的にはすべて公開とされ、また研究の成果はこれも後述するように、広い読者層を有する刊行物をとおして発表された。

４．研究成果

本研究の成果は、基本的には二つのかたちで開示された。（１）国際的な場に対して、（２）国内的な場に対して、である。

（１）の国際的な場に対しての開示に関しては、本研究の出発時の主要な目標の一つであった第21回国際歴史学会議のラウンドテーブル「歴史にグローバルなアプローチはあるか」（Is there a global approach to history?）にディスカッサントとして参加し、グローバル化された場における歴史の脱共同化・個人化の意味を論じたのをはじめとして、2011年にアメリカのサンフランシスコで開催されたアメリカ大学協会会議（ＡＡＵＣ）、7月にアテネで開催された歴史研究集会（ＡＴＥＮＥＩ）に参加し、同様の立場からそれぞれパネラー、報告者を務めた。また国際的な歴史理論誌である *Storia della Storiografia* 誌に、歴史とナショナリティをめぐる論考を掲載した。

（２）の国内的な場においての成果の開示に関しては、（１）の活動を踏まえながら、『歴史学研究』、『歴史評論』、『歴史と地理―世界史の研究』といった幅広い読者層をもつ刊行物をとおして、取り組んだテーマとかかわりのある問題について考察した成果を明らかにした。またＨＰとして『歴史の諸問題』（2010年1月開設、現記事数訳300）を運営し、研究内容にかかわる様々な問題を提示した。あわせて国際文化史学会の創立に関わるなど現在の世界の歴史研究をリードしているピーター・バークの招聘にかかわり、公開セミナーを主催すると共に、その考えの一端を翻訳・紹介した。なおバークの来日に関連しては、『思想』［岩波書店］によって特集号が企画され現在その準備が進められているが、こうした作業はすでに刊行されたヘイドン・ホワイト特集号（2010年8月）とともに、言語論的転回、そして文化史という近年の歴史研究にとって重要なテーマについての問題を広く提起するものとしてその演ずる役割は少なくない。その点でも研究代表者は今後の歴史研究の方向性にそれなりの役割を果たしてきたが、本研究中の最大の成果としてよいのは、以上に記した論考に『東洋大学人間科学総合研究所紀要』などに発表したも

のをくわえて論文集『開かれた歴史へ』（御茶の水書房）を刊行し、研究の一つの到達点を明らかにしたことである。

（３）自らによる評価となるが、これらの一連の活動をとおして明らかにされた、歴史の共同性への疑問、歴史を個人化していくことの必要性の提起は、国際的にも、国内的にもきわめて個性的な、独創的な内容を含むもので、内外の研究者から一定の関心をもって迎えられた。また『開かれた歴史へ』所載の巻頭論文においいて示された、歴史研究の現在的問題を言語論的転回と文化史を軸にして考察するという視点は、少なからぬ歴史研究者の同意するところであり、その意味でも研究代表者のこの間の研究は一定の成果を生み出していると考えている。

（４）成果に不足するところがあるとすれば、予定をしていた2012年4月にグラスゴウで開催されたヨーロッパ社会科学歴史学会（ＥＳＳＨＣ）での発表がパネルの取り消しで実現せず、また研究期間後期において、前述の論文集、バーク招聘の準備、さらには東洋大学人間科学総合研究所プロジェクトから派生した史学史の再検討のための論文集（『歴史として、記憶として』というタイトルで2013年5月に御茶の水書房より刊行予定）の刊行準備に追われ、英文報告集の作成の準備を進めたにもかかわらず具体的な作成にはいたらず、国際的なかたちでの成果の開示が当初の予定通りには進行しなかったことである。この点の不足は既に予定されている国際史学史歴史理論学会（ＩＣＨＴＨ・・・2013年9月ボーフムで開催予定）における発表などを手掛かりに、いくつかの試みを積み重ね、実現を計っていくことを考えている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

①岡本充弘「歴史のハイアラーキー―近代の知の秩序」『世界史研究論叢』査読無（依頼）、第２号、2012年10月、5～8頁

②岡本充弘「開かれた歴史へ―言語論的転回と文化史」『歴史評論』査読無（依頼）、745号、2012年５月号、42～54頁。

③岡本充弘「何が歴史について問われているのか？―脱構築のかなたにあるもの―」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』査読有、第14号、2012年３月、119～131頁

④岡本充弘「読書案内―グローバルヒストリー」『歴史と地理―世界史の研究』査読無（依頼）、2012年２月号、山川出版社、35～38頁。

⑤岡本充弘「第21回国際歴史学会議アムステルダム大会（一）ラウンドテーブル７：歴史にグローバルなアプローチはあるか？」『歴史学研究』査読無（依頼）、878号、2011年４月号、30～36頁。

⑥Michihiro Okamoto, ‘An Answer to the Question, ‘Is There a Global Approach to History?’, 『歴史のトランスナショナル化とその問題点―東洋大学人間科学総合研究所プロジェクト報告』、査読無、2011年２月、67～73 頁

⑦岡本充弘「序」『歴史のトランスナショナル化とその問題点―東洋大学人間科学総合研究所プロジェクト報告』査読無、2011 年 2 月、1～8頁

⑧ Michihiro Okamoto, ‘History and Nationality: Beyond Nationalized History?`, S*toria della Storiografia,* 査読有、vol.58, Dec. 2010, pp.104115.

［翻訳・ならびに解題］（計３点）

①ピーター・バーク、岡本充弘・松原俊文訳「情報の多すぎた時代、少なかった時代」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』、第 14 号、2013年３月、5～14頁

②「ヘイドン・ホワイトに聞く」聞き手＝エヴァ・ドマンスカ、岡本充弘訳・解題『思想』、査読無・依頼、No.1036, pp.46-72, 2010 年 8 月

③「実用的な過去」佐藤啓介訳、同上,pp.11-33,（岡本充弘解題、同上、査読無・依頼、pp.8-11）, 2010年８月

〔学会発表〕（計４件）

①報告、岡本充弘「歴史のハイアラーキー―近代の知の秩序」世界史研究会、2011年12月24日、於東京電機大学

②Michihiro Okamoto, The Problem of the Commonization of History”, 9th Annual International Conference on History from Ancient to Modern, 2011 年 7 月 31

日（於アテネ）

③Li Li, MIchihiro Okamoto, & Jeniffer Yim, ‘Global Positioning: Essential Learning, Student Success and the Currency of U.S. Degree: The East Asia Challenge and American Higher Education’, American Association of Colleges and Universities, 2011 年 1 月 28 日（於サンフランシスコ）

④Michihiro Okamoto, ‘Global History in a Borderless Age’, at a roundtable, “Is There a Global Approach to History?’, 21st International Congress of Historical Science, 2010 年 8 月 23 日(於アムステルダム)

〔図書〕（計１件）

①岡本充弘『開かれた歴史へ―脱構築のかなたにあるもの』御茶の水書房、2013 年１月、250 頁

〔その他〕

ホームページ等

『歴史の諸問題』

（http://tsyokmt.exblog.jp/）

６．研究組織

(1)研究代表者

岡本　充弘（OKAMOTO MICHIHIRO）

東洋大学・文学部・教授・

研究者番号：40113930

(2)研究分担者（0）

(3)連携研究者（0）